

伝藤原為家筆野路切『古今和歌集』考

—資料集成と本文系統をめぐって—

寺田 伝

一. はじめに

藤原為家を伝称筆者とする『古今和歌集』の断簡は、小松茂美氏の『古筆学大成』¹⁾に所収されているだけでも実に十四種類もの多くを数えるが、そのうち特に名のついた切といえは北野切・野路切・角倉切・大坂切の四点である。いずれも鎌倉期に流行した力強く端正な書風を示しており書道史的に高い価値を持つが、また、その内容を詳しく分析してみると今日一般に読まれている定家本系統の本文とは異なっており、国文学研究上からも大いに注目されるのである。

本稿は、そのなかでも『古筆学大成』が「伝藤原為家筆野路切本古今和歌集」と分類する断簡について取り上げて考察したい(以下、野路切とする)。野路切の本文について、はやく小松茂美

氏が「系統不明というよりほかない」とされて以降、特に目立つた論考はみられない。『古筆学大成』が出版された時点ではわずか七葉が確認されるに過ぎず、その狭い調査範囲から「系統不明」とされたのは穏当な判断であったといえる。しかしながら、その後久曾神昇氏の『古筆切影印解説I古今集編』²⁾や、田中登氏の『平成新修古筆資料集』³⁾といった影印刊行物が出版されるなど新出資料が続々と発見・報告されているし、また私見では『古筆学大成』の分類には若干問題があるように思われ、他にも筆者に関する異伝のツレの存在を指摘できると考えている。そこでまずは現時点において野路切と認められる資料をここに集成してみることはじめたいと思う。その上で本文系統について検証し、野路切が今日まで伝存する意義について考察を試みたい。

二. 伝藤原為家筆野路切について

野路切は、伝称筆者を藤原為家とする『古今和歌集』の断簡で、もと綴葉装、四半形の冊子本。大きさは縦25.0cm×横14.3cmとやや縦長で、料紙は鳥ノ子紙が用いられている。一面およそ七行に書くが、まれに八行に書くものもある。和歌は一首二行書にされ、詞書は和歌より一字下げて書き、作者名の位置は紙面中程の高い所から書く。書風は「為家筆」と鑑定されるにふさわしく伸びやかで闊達とした字であるが、時おり細字によつてなされる勘物などからは繊細な印象も見受けられる。無論、為家の真筆とは認められず、書写年代は鎌倉中頃から後期にかけての頃であろう。なお、野路切という名称は、静嘉堂文庫に所蔵される写本系の名葉集『古筆切目安』に「野路切 四半古今」という記載がみえ、藤田美術館に所蔵の手鑑「野草芳」ではこの名称が用いられている。⁵⁾ 注目されるのは本文系統で、定家本とは明らかに異なっている点多いが、そのことについてはまた後ほど改めて述べたい。

さて、前述したように『古筆学大成』には七葉掲載されているが、その後に紹介されたものや、また架蔵の一葉をくわえて次に一覧して示した(歌番号は『新編国歌大観』による。以下同じ)。

【表一】伝藤原為家筆野路切

	所載先	部立・歌番号	備考
①	『古筆切影印解説—古今集編』第64図	仮名序 <small>(ぬれはいま)</small>	古筆了佐極
②	壇書会刊『銀瓶』(『大成』第28図)	春上巻頭 1和歌	
③	個人蔵手鑑(『大成』第29図)	春上52作者 53和歌	
④	『古今和歌集成立論』第151図 (『大成』積文3)	春下巻頭 70和歌	
⑤	藤田美術館蔵「野草芳」 (『大成』積文3)	夏 158和歌 160詞書	
⑥	梅沢記念館蔵「あけぼの」 (『大成』第24図)	夏 162和歌 164和歌	
⑦	ふくやま書道美術館「古筆手鑑」第50図	秋上231作者 232和歌	古筆了佐極
⑧	架蔵	離別379和歌 380和歌	古筆了佐極
⑨	個人蔵(『大成』第25図)	離別384和歌 385和歌	
⑩	春日井市道風記念館「古今集の古筆」第32図	離別386和歌 388詞書	
⑪	永青文庫蔵「墨叢」(『大成』第26図)	羈旅413詞書 414作者	古筆了栄極
⑫	梅沢記念館蔵「あけぼの」 (『大成』第27図)	物名426詞書 427和歌	

このように現時点では十二葉を確認することができる。伝存範囲は『古今和歌集』の仮名序から巻十までに限られており、もとは上下二帖であったと考えられるが、下帖のほうは早くに散逸してしまったようである。極札は確認できる限りいずれも古筆本家によるもので、最も早い例は初代古筆了佐であることから、江戸初期には既に切断がはじまったことが知られる。なお架蔵の一葉は、本稿末尾に図版を掲げたので合わせて参照いただければ幸いである。

そして稿者はこれに筆者に関する異伝のツレとしてさらに数葉を追加することが出来ると考えている。次に詳しく検討するが、その対象となるのは『古筆学大成』が「伝越部局筆古今和歌集切」と分類する断簡である（以下、伝越部局筆切とする）。

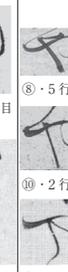
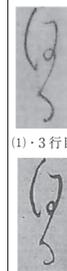
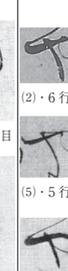
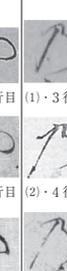
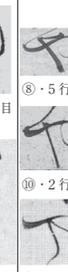
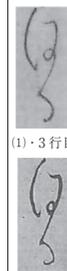
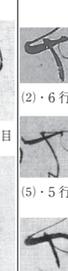
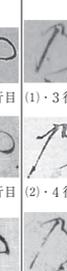
三、伝越部局筆切について―野路切の異伝資料として―

伝越部局筆切は、『古筆学大成』に四葉掲載されているが、そのほか図版資料によって確認できるものをあわせると、次に示すように七葉を確認できる。

	所載先	部立・歌番号	備考
(1)	『平成新修古筆資料集 第二集』第108図	春上 56 詞書、57 和歌	別家了任極
(2)	『平成新修古筆資料集 第二集』第109図	春下 80 詞書、異本歌作者	神田道伴極
(3)	『古筆切影印解説Ⅰ 古今集編』第50図	春下 130 作者、132 詞書	畠山牛庵極
(4)	個人蔵「千歳のとも」 〔大成〕第20図	春下 134 作者、同和歌	
(5)	五島美術館蔵「毫戦筆陣」 〔大成〕第20図	夏 150 和歌、155 和歌*	畠山牛庵極
(6)	徳川美術館蔵「玉海」 〔大成〕第203図	秋下 271 和歌、272 和歌	畠山牛庵極
(7)	個人蔵〔大成〕補遺 第29図	羈旅 407 詞書、408 和歌	

*は歌序が相異なる。

まずは、伝越部局筆切の書誌について簡潔に述べたい。もと綴葉装、四半形の冊子本。料紙は鳥の子紙。大きさは、縦23・6 cm × 横14・0 cm。一面およそ七行書、まれに八行書。和歌は一首二行書で、詞書は和歌より一字下げて書き、作者名は高い位置から書かれる。そのほか細字による書き入れもみられるなど、その書式は先に述べた野路切とほぼ同一のものであるといえよう。そして次に示すように、両者は筆跡において特に類似性が認められ注目される。

	伝藤原為家筆 野路切						伝越部局筆切					
(f)												
	⑥・4行目	⑩・1行目	③・7行目	④・4行目	⑨・4行目	⑧・5行目	⑤・2行目	②・5行目	⑩・2行目	⑥・7行目	①・2行目	①・3行目
(e)												
	⑤・2行目	⑦・6行目	②・4行目	④・3行目	①・1行目	②・6行目	①・3行目	②・4行目	⑤・5行目	⑤・3行目	③・4行目	

ここに六例ばかり掲げたが、それぞれ共通する点を述べてみた。 (a) 「乃」は、第一画の直線的におろされ、それが少し長く伸びるために全体的に左に傾いている。 (b) 「や」は、粘り強い起筆から次筆にかけて、あたかも円を描くような曲線を描いている。 (c) 「き」は、第一画から第三画にかけての流れるような線に特徴を見出せよう。 以下、(d) 「は」、(e) 「読」「人」、(f) 「ほ(本)」「す(寿)」などに各々に同筆の趣をみてとることができ、あるいは(d) 「はる」、(e) 「読人しらず」、(f) 「ほと、ぎす」とつづけてみた際の連綿にも注目したい。 なかでも(e) 「読人しらず」では「しらず」がほとんど直線的に縦に長く伸びている点。 また(f) 「ほと、ぎす」では「ほ」から「と」につづけようとするために「と」が中心から外れて右寄りになっている点などに顕著な類似性が見出せよう。 わずか六例ばかりであるが、これら共通する特徴から両者同筆であると認められる。

以上のことから、伝越部局筆切は野路切のツレであると考へられ、ここに都合十九葉を数えることができるのである。

なお、筆者に関する異伝が生じたことについて付け加えておきたい。 次に確認できるかぎりの極札を掲げ、伝称筆者別に分類した。

- 伝為家筆 —— 古筆本家 …………… ①・⑦・⑧・⑩
- 伝越部局筆
 - 古筆別家 (二代了任) …………… (1)
 - 畠山牛庵 (二代) …………… (3)・(5)・(6)
 - 神田道伴 (四代) …………… (2)

これを見るにやや数に乏しいが、「為家筆」とする極札は古筆本家(初代了任・二代了榮)のものに限られ、「越部局筆」とする極札は本家以外のもの(別家二代了任・二代畠山牛庵・四代神田道伴)に限られていることがわかる。 つまり、その異伝が生じた要因を鑑定者の違いに求めることが出来るのである。 『古筆学大成』において鎌倉まで時代が下ったものとなると、およそ極札にしたがつて分類しているように思われるのであるが、今後ともその分類には注意を払う必要がある。

四. 本文系統の検討

それでは本文系統についての検証を行いたい。 これまで野路切の本文系統は不明であったが、野路切として十九葉を集成することができ、ある程度調査できる範囲も広がったので、本文系統の認定も可能であると考ええる。 個々の事例については既に先学の指摘もあるが、以下にまとめて再検討を行いたい。

まず、断簡(5)において歌序の相違がみられることが注目される。一般的に定家本では歌が「…151 152 153…」と配列される箇所であるが、野路切では次のような配列となっている(初句のみを抜き出して翻刻。また私に濁点を付し、()内に歌番号を示す)。

○断簡(5)

いまさらに… (151)
 やよやまで… (152)
 やとりせし… (155)

このように、はじめに151番歌・152番歌とならび、そこに突如として155番歌が配列されているのである。一見、変わった配列のようにも思われるが、ここは諸本においても様々な配列がなされる箇所である。その諸本間の相違は、おおよそ次のように三つのグループに分類することができる。

【表四】 諸本における151番歌から155番歌にかけての配列

元永本・雅経本 俊成本・定家本	六条家本・ 清輔本承諸本	私稿本・雅俗山莊本・ 静嘉堂本・伝公任筆本
いまさらに (151) やよやまで (152) さみだれに (153) よやくらき (154) やどりせし (155)	いまさらに (151) やよやまで (152) よやくらき (154) さみだれに (153) やどりせし (155)	いまさらに (151) やよやまで (152) やどりせし (155) さみだれに (153) よやくらき (154)

野路切の伝存範囲と重なる部分をゴシック体で示したが、その

配列は表下段のものと一致していることがわかる。残念ながら野路切は断簡となつているために本文を途中までしか伝えていないが、おそらくは表下段のような配列がなされていたと考えられる。諸本のなかで、これと同じ配列をとっているのは【表四】下段、私稿本・雅俗山莊本・静嘉堂本・伝公任筆本などいずれも伝存稀な古写本ばかりで、野路切がいかに特殊な本文をとっているのが知られるのである。

○断簡(2)

けるあひたおれるさくらのちりか
 たになりけるをみてよめる

典侍藤原因香朝臣

たれこめてはるのゆくゑもしらぬまに
 まらしさくらもうつろひにけり (80)

さくらのやりみづにちり侍けるを
 みて

紀貫之

ここで問題となるのは最後の二行で、80番歌の次にみえる歌(詞書・作者名のみ)は、通常流布本である定家本には存在しない、いわゆる異本歌である。こちらも断簡であるため本文を途中までしか伝えていないのであるが、この後には当然のことながら和

歌「ゆくみづに風のふきいる、さくら花きえずながる、雪かどぞみる」が続くと考えられる。この異本歌を持ち合わせているのは諸本のなかで亀山切・元永本・雅俗山荘本・六条家本・清輔本系諸本といった次第で、ここでも雅俗山荘本と一致していることが確認される。

さらに、部類名の様式についてもみてみたい。幸い、冒頭部を伝える断簡が残っているので、以下に該当本文を抄出して掲げる。

○断簡②

古今和歌集巻第一

春歌上

○断簡④

古今和歌集巻第二

春歌下

右のように野路切では、内題・部類名が二行に書かれている。そこで主な諸本ではどうなっているのかを次表に示したが、野路切と同じ部題名の様式をとっているのは、俊成系諸本・定家本・雅俗山荘本・静嘉堂本であり、やはり雅俗山荘本と一致していることが確認されるのである。

【表五】 諸本における部類名の様式

私稿本・元永本	六条家本・清輔本系諸本 雅経本・伝公任筆本	雅俗山荘本・静嘉堂本 俊成本・定家本
古今和歌集巻第一 春上	古今和歌集巻第一 春歌上	古今和歌集巻第一 春歌上
古今和歌集巻第二 春下	古今和歌集巻第二 春歌下	古今和歌集巻第二 春歌下

このように歌序の相違・異本歌の有無・部類名の様式といった大きな枠組みから野路切の本文を検討すると、現存諸本において雅俗山荘本と特に一致しているのであるが、最後にもう少し細かな本文の異同をみてみたい。たとえば、断簡③の春上53番歌の詞書において、野路切は次のような本文をとっている（該当箇所には便宜的に傍線を付した）。

なぎさの院にてさくらのなをみてよめる

定家本をはじめ俊成本系諸本や清輔本系諸本では「さくらをみて」となっており「はな」が無い。だが、野路切のように「さくらのなをみて」という本文は、私稿本・元永本・関戸本・六条家本・伝公任筆本のほか、雅俗山荘本・静嘉堂本（雅俗山荘本と同系統の伝本）と一致している。

また、断簡⑥の夏162番歌をみてみたい。

ほと、ぎす人まつやまになくなれば

われもうちつけにこひまさるなり

傍線部において、定家本のほか元家本や俊成本系諸本では「我うちつけに」とあって、「も」がないのであるが、傍線部のように「われもうちつけに」とあるのは、私稿本・基俊本・雅経本・清輔本系諸本・雅俗山荘本・静嘉堂本である。

あるいは、断簡(4)の131番歌では

こゑたえずなげやうぐひすひと、せに

ふた、びとたにくべきはるかは

傍線部は元永本・清輔系諸本・俊成系諸本・伝公任筆本では「こゑた、ず」、私稿本では「こゑたて、」とあつて対立しているのであるが、一方で、定家本をはじめ雅俗山荘本・静嘉堂本「こゑたえず」となつて一致しているのである。

以上のように細かい本文上においても野路切と雅俗山荘本が一致していることから、野路切は雅俗山荘本と同一の本文系統であると考えられる。雅俗山荘本は数ある『古今和歌集』諸本のなかでも兼行本系統に属するとされているが、その兼行本系統のなかで今日完本として伝わるのは雅俗山荘本が知られるのみで、そのほか上帖のみを静嘉堂本が伝えているばかりである。そのような数少ない兼行本系統の本文を伝える一資料として、野路切の存在は貴重といえよう。

五. 野路切の勘物

ところが、野路切と雅俗山荘本には大きな相違点もみられる。たとえば、野路切の断簡②には巻頭に「歌六十八首 此中返歌一首」という勘物がみえるが、雅俗山荘本の該当部分を参照し

ても、そのような勘物はどこにもみえない。次に、野路切の勘物を一覧にする。(私に改行・句読点等を施す)

【表六】野路切の勘物

断簡⑩	断簡⑦		断簡⑥	断簡①		断簡③		断簡②	
387	232	231	163	57	56	53	52	1	野路切
歌 江口 作者名	歌 後度	歌 内大臣高藤二男 作者名	歌 御本無之 作者名	同	歌 桜	作者名 忠仁公	作者名 忠仁公	作者名 棟梁男 業平孫	卷頭 歌六十八首 此中返歌一首
金玉	一首 江口遊女 後度	一首 于時左少将 内大臣高藤二男 母宮内大甫宮道弥益女 号三条右大臣 後度女郎合歌也	御本無名			廿九首 蔵人頭右中	一首 忠仁公 冬嗣公二男	元方 棟梁男 入歌十四首 国經大納言 為猶子後變改云々	清輔本(前田家本)

上段は野路切の勘物、下段は清輔本の勘物であるが、小松茂美氏によって既に指摘されているように、これらの多くは清輔本の勘物であることが知られる。

また、さらに詳しくみてみるに、断簡②の「棟梁男 業平孫」とある勘物は、現存諸本のいずれにも見出すことができないが、寂庵本に書き入れられた俊成本との校合勘物「棟梁男 業平朝臣孫」とあるのにはば一致しており、わずかながらに俊成本の影響も見てとれる。¹⁰⁾

前述したように野路切の本文そのものは雅俗山荘本と同系統であることから、これらの勘物は清輔本・俊成本といった他本との校合によって書き加えられたものと考えられる。

六、野路切と雅俗山荘本の奥書

そこで注目されるのが雅俗山荘本にみえる奥書である。雅俗山荘本については久曾神昇氏『古今和歌集成立論』に詳細な解説があるが、それを踏まえて野路切との関係から捉えなおしてみたい。以下にその奥書を内容ごとにA・Bに分けて掲げる。

○雅俗山荘本奥書

以或古三代集兼行写之一具本写之。

— A

和歌并詞等不似余本頗以相違。然而為証本一流歟。

又校合之本四本内、

— B

一本、花園左府御本也。

一本、貫之女自筆本也。彼正本道誉僧正御房在之。

一本、俊成卿自筆本也。

一本、通宗本流本也。^{清輔}件正本、於皇太后宮燒失了云々

(…中略…)

清輔朝臣自筆本、進上二条院。其後故伯宮僧都御伝領、

其後太政僧正又令伝領給。猷円律師申出之写之。

以彼本又校合了。

まず、奥書Aに記載される「兼行」とは陽成天皇の三代孫で能書家として有名な源兼行と考えられる。雅俗山荘本はその兼行が書写した『古今和歌集』を祖本にするというのであり、兼行本系統という名称はこれに由来している。¹¹⁾

また、奥書Bには計五本によって校合したことが記されている。各伝本について少し注を加えると、「花園左府御本」「貫之女自筆本」は、いわゆる三証本の一つで今日の雅経本の祖本になるものと考えられる。つづく次の二本「俊成卿自筆本」「通宗本流本」はともに内部でも系統が分かれることが確認されているが、おおむね俊成本、清輔本とみてよからう。そして「清輔

朝臣自筆本……」以下の記述によれば、さらに又別種の清輔本と校合したというのである。

このように雅俗山莊本の奥書から、①兼行本を底本とするのと、②複数の他系統本によって校合が行われたことが確認できる。ただし雅俗山莊本それ自体については、久曾神氏が述べておられるように「五本で校合したというが、詳細に校合したとは考えられない」とみるべきで勘物等はほとんど見られない。しかしながら、その雅俗山莊本と同系統の本文をもつ野路切が、勘物として清輔本・俊成本の要素を取り込んでいたことは、この際注意されてよい。繰り返しになるが、野路切が兼行本系統の本文であること、また特にその勘物に清輔本・俊成本といった複数の伝本からの影響がみられることは、まさしく雅俗山莊本にある奥書の内容に合致するのである。このことから両本がある時点までは伝来を同じくしていた可能性は極めて高い。

たしかに久曾神氏のいわれるように雅俗山莊本にはあまり校合がなされた形跡はみられない。だが、右のような奥書が存する限りは、もう少し複雑な伝来過程が想定されても良いはずである。もともとは源兼行の手になった『古今和歌集』は転写されるある時点において、雅俗山莊本の奥書にあるような校合がなされ、勘物が加わった。それがまた転写されるなかで、勘物を省

略してしまったものが雅俗山莊本であり、また一方で、勘物を多くその姿に残したものが野路切である、と推測されるのである。

七. おわりに

以上、伝藤原為家筆の名物・野路切の資料を集成し、その本文系統について検証を行った。野路切の本文が兼行本系統であることを確認し、また雅俗山莊本にみえる奥書との関連性を指摘した。兼行本系統は伝存数が極めて少ないために、その実態は必ずしも明らかではない。さらなる資料の博搜に努めるとともにより具体的な検証を行いたく思う。

また、これまで野路切の本文系統は不明のままにされてきたが、それは従来資料に乏しかったこともあるうし、伝藤原為家筆野路切と伝越部局筆切がそれぞれ別種のものとして扱われてしまったことも大きな要因であった。その意味で、筆者に関する異伝の切を整理し、統合してゆくことが今後の古筆研究における重要な課題といえるだろう。

附・新出資料の紹介

最後に、架蔵の野路切を一葉紹介しておきたい。大きさは、

縦23・2 cm×横11・3 cmの四半形。横の寸法をみるに一行分ほど切り取られているようで、左端にわずかに墨が残っているのが確認できる。内容は、『古今和歌集』巻八・離別の379番の歌から380番の歌にかけての部分。翻刻を掲げると以下の通りである。

しらくものこなかたかなたにたちわかれ

こゝろをぬさとたむくよひかなくたくたひかなイ (379)

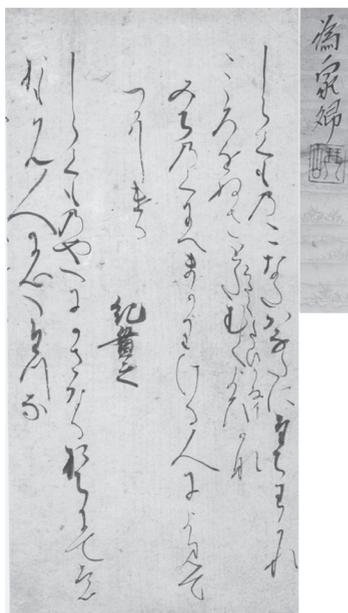
みちのくにへまかりける人によみて

つかはしける 紀貫之

しらくものへやにかさなるおちにても

おもはん人に心へたつな (380)

【断簡⑧・凶版】



注

(1) 小松茂美氏『古筆学大成 第五卷 古今和歌集(五)』(講談社、一九八九)。

(2) 久曾神昇氏『古筆切影印解説I 古今集編』(風間書房、一九九四)。

(3) 田中登氏『平成新修古筆資料集』第二集(思文閣出版、二〇〇三)、第三集(思文閣出版、二〇〇六)。

(4) 伊井春樹氏『新版 古筆名葉集』(古代中世文学資料研究叢書2、和泉書院、一九八八)。

(5) 小松茂美氏編『日本書道辞典』(二玄社、一九八七)。なお、『古筆切名物』には「野路切 四半古今歌一行書」と記述されている(MUSEUM東京国立博物館美術誌11号、一九七〇)。しかしながら、伝為家筆の一行書まで「野路切」という極札があるものは管見になく、編者では藤田美術館蔵手鑑「野草芳」に「野路切」とあることを重要視する。

(6) 『新撰古筆名葉集』の越部局の項に「四半古今」との記述が見出せる。なお、出光美術館所蔵の国宝手鑑「見ぬ世の友」には越部局を伝称筆者とする『古今和歌集』の断簡に「阿野切」という名称が付せられているが、これは本稿で扱う伝越部局筆切とは全く別種のもので、『古筆名葉集』がどちらを

指しているのかは不明である。

- (7) 田中登氏は、断簡(1)・(2)について「筆跡が酷似するが、筆の太さが微妙に違い、字高もいくぶん異なるので、未だ両者をツレと断定するには至っていない」とされる。だが、まづ字高についていえば、例えば『古筆学大成』第202図の一葉をみるに第二首と第三首では一字分ほど差が開いているから、必ずしも一定した字高で書写していたとはいえないし、また筆の太さについても箇所によっては強弱をつけて書写しているように思われる。したがって田中氏が指摘される「筆の太さ」「字高」といった差異を、書き手の書写態度によるものとして稿者はすべてツレと判断する。なお、田中登氏は、後に『平成新修古筆資料集』補訂稿」のなかで、この伝越部局筆を野路切のツレとされたが、その理由を示しておらず、ここに検証する次第である。
- (8) ただし、古来より和歌の聖典として仰がれる『古今和歌集』という作品の性質上、一人の筆者が複数回にわたって、なおかつ同じ形式で書写したという可能性も考えられないわけではない。だが、伝存範囲が重なる断簡が存在しない以上は留意するにとどめておきたい。

(9) 校異に際しては久曾神昇氏『古今和歌集成立論』資料編

(風間書房、一九六〇)を参照した。伝公任筆本については小松茂美氏編『伝藤原公任筆 古今和歌集』(旺文社、一九九五)を参照した。

(10) また、建久二年本にも、130番歌の勘物であるが「棟梁男業平朝臣孫」とある。

(11) 源兼行は高野切の筆者(第二種)でもあるが、高野切と兼行本系統の本文とは必ずしも一致しているわけではなく別種のものかと考えられる。

(てらだ つたう／大阪大学大学院生)